

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.24

発行日 ● 平成26年(2014)2月28日

もくじ

| | |
|------------------|-----|
| ごあいさつ | 1 |
| 座談会—南1号館の思い出を語る— | 2-4 |

ごあいさつ

学習院大学史料館では、平成22年(2010)に『学習院目白の学び舎：学内に遺る歴史ある建築』を、このたびはその続編ともいふべき『学習院 南1号館』を上梓いたしました。ミュージアムレターNo.24の特集は、これにちなんで、理学部棟としての南1号館で学ばれた方々に思い出を語っていただく座談会の収録となっております。

旧制学習院の理科教場として昭和2年(1927)に建てられ、戦後、理学部棟となった南1号館は、「目白の学び舎」の一部を成すわけですが、「学び舎」という懐かしい言葉が示唆するのは、モノとしての建造物のことだけではないように思います。学びの環境全体でもあり、また、教師と学生生徒の結びつき、学生生徒の間での横や縦の結びつき全体が、この言葉に含まれているのではないのでしょうか。「学び舎」が卒業後もそこで学んだ人々を支え続けていることを、本号の座談会出席者諸兄は生き生きと語っておられます。諸兄は昭和30～40年代に大学理学部で学ばれた方々ですが、当時はガラスの実験器具を作るところから始め、ときに危険を伴う作業や実験を一緒にすることを通じて、先輩と後輩、同輩相互のあいだに強い絆が生まれた、というお話には深く頷けるものがありました。

そうした絆の発生を含めて大学が「学び舎」であり続けるためには、適正規模というものがあるような気がします。学習院大学は今のところかろうじてその適正規模を保っているようですが、座談会の中でも、教師と学生との関係、学科相互の関係が昔ほど密ではなくなってしまった、というご指摘がありました。当時、理学部全体の1割程度だった女子学生が現在では半数近いというのは歓迎すべき変化だと思いますが、「学び舎」本来のあり方自体は約90年の歴史ある南1号館の建物とともに、末永く保たれることを願わずにはいられません。

末筆ながら、座談会にご出席くださった皆様方に厚く御礼申し上げます。

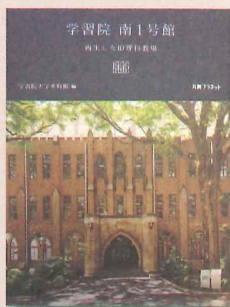
私事にわたりますが、史料館長としての私の任期は今年度で終了します。今後とも史料館を見守っていただけますよう、どうぞよろしく願いいたします。

館長 高橋裕子

ご案内

学習院 南1号館 再生した旧理科教場

学習院大学史料館 [編]
丸善プラネット株式会社発行
148×200mm・84頁
本体価格 1,200円+税
ISBN 978-4-86345-183-4 C0070



全国書店にて発売中



改修前の南1号館(平成21年頃)